

# 京都の学縁を綴る－託されることと託すこと

横山 操

## はじめに

千葉豊先生ご退職の寿ぎに寄せて、千葉先生の研究フィールドである京都の地での、人と学問が織りなす縁、研究史「未然」の物語を綴りたいと思います。個人的な回想が多く含まれることをご容赦いただければ幸いです。

科学、文化、伝統が響き合うこの場所で育まれる次世代の研究者たちが、それぞれの新たな地平を切り拓くことを心より願いつつ、人の温かな縁と、そこから生まれる多元的な学びこそが禍福の波に揺らがらない道標となることを、私なりの「京都学」の萌芽として記してみたいと思います。

## ひとかけらの陶片－遺跡の資料と現代の茶陶

大学院生の頃、博物館実習で考古学をご担当くださったのが他ならぬ千葉豊先生でした。農学研究科からただひとり受講する私に「測量士補資格は持っている？考古調査では、最新の測量機材の扱い方よりも、文化財を傷つけないように歩くこと。大切なのは気持ちかなあ」と、丁寧で温かいご指導をいただいたことを覚えています。

けれども千葉先生を初めて知ったのは、それより少し前に遡ります。ご縁のある京焼の名工・四代西村徳泉(徳二郎)先生<sup>(1)</sup>のご自宅を、母と祖父と訪ねて、優美で鮮やかな京焼の作品の数々を拝見した際、徳二郎先生が、遺跡から出土する尾形乾山の陶片について考古学者たちと勉強会を開いていると語ってくださったことがありました。

そして千葉先生こそが、その考古学者のおひとりだと気がついたのは、京都大学総合博物館の研究員として、文化財発掘展<sup>(2)</sup>準備に携わっていたときでした。京大病院構内で出土した乾山焼、鳴滝と聖護院窯、そして蓮月焼。千葉先生の言葉と陶片の手触りが、遠い記憶と結びつき、その瞬間、長く閉じられていた扉がパッと開いて、爽やかな風が吹き込ん

だように感じました。そして、徳二郎先生の傘寿記念茶陶展<sup>(3)</sup>の会場に伺って、その喜びをお伝えしたことを懐かしく思い出します。

## 恩師のことば－大学の中と外

大学院では指導教官(主査)の則元京先生<sup>(4)</sup>、副査の川井秀一先生<sup>(5)</sup>、今村祐嗣先生<sup>(6)</sup>をはじめとする諸先生からご指導をいただき、学外においても、温かな眼差しの中で恵まれて過ごした日々でした。

幼い頃、「お嬢ちゃん、いつでも博物館に遊びにおいでなさいね」と柔和な笑顔で声をかけてくださる、ご近所の老紳士がいらっしゃいました。京都文化博物館の角田文衛先生<sup>(7)</sup>でした。「子どもがお仕事場に行ってもいいのかな」と幼心に迷い、結局、博物館を訪ねることはできませんでしたが、それから20年あまり経った頃、山口県美東町のシンポジウム<sup>(8)</sup>でご講演される宮内庁正倉院事務所の成瀬正和先生<sup>(9)</sup>にご案内いただいた折、偶然再会することができました。思わず駆け寄って、学位取得を報告した私に、「お嬢ちゃん大きくなったねえ。頑張ってお勉強を続けなさいね」と、懐かしい笑顔を向けてくださいました。

茶道の師匠が学位取得のお祝いの席を設けてくださった際、京料理店のご主人が「今日はめでたい日ですわ」と、居合わせた客のお一人に話してくださったところ、「僕からもお祝いしましょう!」とさっと盃を掲げて乾杯してくださったのは、門脇禎二先生<sup>(10)</sup>でした。

そうした出来事を、実験の合間に指導教官の則元先生にお話すると、何も知らない私に呆れながら、著された書籍などを教えてくださいました。実験科学者で空手家、文武両道の則元先生が、歴史学や文学を語られるのを聞くのは不思議で楽しくもありました。当時はウィキペディアも ChatGPT ありませんでしたが、ずっと実験室にしながら、閉塞感を知らず自在に学べたことは、思えば幸せな日々でした。

学位取得は、そのような守られている場所から外に出る節目ともなります。則元先生から「今日からは、弟子としてではなく、一人の研究者として、一对一の人間として対等やからね」と言われたこと。門脇先生から「指導教官を大好きで尊敬しているのは分かる。でも、恩師の仕事を正しく批判できるようになってからのあなたの仕事が、学位への本当の恩返しになる。ずっと憧れたままでは駄目だよ。」と諭されたことは、今なお私の戒めとなっています。そして、それらの言葉への当惑を思わず吐露してしまった私に、則元先生の指導教官であった山田正先生<sup>(11)</sup>が「いやあ、これからますます楽しみですなあ、はっはっはっ」

と嬉しそうに笑われたことも、温かな思い出です。

千葉先生と徳二郎先生の陶片をめぐる対話のエピソードは、そのような学位取得の節目にあった私に、大きな印象を残しました。大学での研究と京の街に息づく伝統文化、その両方の学びを深め、異なる知と対話できるようになりたいという私の願いの起点になりました。

## 足元に眠る京都－濱田青陵先生のこと

私は京都学派の考古学系譜に連なる研究者ではありません。そのため濱田青陵先生の学統にいらっしゃる千葉先生の記念論集への寄稿にあたり、鹿ヶ谷・法然院の青陵先生のお墓に手を合わせに参りました。

初めてのお墓参りは、法然院の貫主・梶田真章<sup>(12)</sup>ご住職の導きで、青陵先生のお孫様である海藻研究の濱田仁先生<sup>(13)</sup>とご一緒させていただきました。梶田貫主には、濱田家の墓前で丁寧にお経を唱えていただきました。

仁先生には、京都大学SPRITSシンポジウム<sup>(14)</sup>で、総合博物館所蔵のエジプト資料・コプト織物の研究紹介をした際、聴講くださっていたメトロポリタン美術館名誉館員の梶谷宣子先生<sup>(15)</sup>と進々堂の続木泰子様<sup>(16)</sup>がご紹介くださいました。青陵先生の掛け軸のある部屋で、濱田仁先生(青陵先生の長男・稔氏のご子息)と濱田祥様(青陵先生の三男・重氏のご子息)にお目にかかる機会をいただき、御蔵書の一冊『通論考古学』をお渡しいただき、「お話しできて楽しかった。今、爺さんが生きていたら、貴女のことをきっと大好きだったと思うよ」という温かな言葉をいただいたことは、その後の研究活動において、心の支えとなりました。

その後、泉拓良先生<sup>(17)</sup>、千葉先生、富井眞先生<sup>(18)</sup>のお計らいで、濱田仁先生、そして片山一道先生<sup>(19)</sup>とご一緒に、京都大学総合博物館「火焰型土器と西の縄文 Jomonese Japan 2017」において北白川遺跡群発見の端緒となった、青陵先生がご長男の稔氏と散歩中に見つけられたという石斧を拝見しました。仁先生が「見つけたのは、僕の父ですね」と微笑まれたとき、展示のキャプションに記された資料の発見日が、ちょうどその日と一致することに気がついたのです。

### 三つの木片－木の文化と科学

「日本は木の文化である」と記されたのは小原二郎先生<sup>(20)</sup>でした。

学位を取得したばかりの頃、則元先生と研究室でお話ししていたとき「これから、どのような研究をしたいと考えているか」とさりげなく問われ、小原二郎先生の「ヒノキ材は100年後まで強度が上がり、その後緩やかに低下する」という記述を実験で再検証し、文化財の保全に役立てたいと申し上げました。それまで誰かに話したことはなく、つい大それたことを口にしてしまったと一瞬後悔したのですが、則元先生は顔色も変えず「そうか」とパツと立ち上がり、教授室に戻られました。そして小原先生の電話番号をメモした紙を手渡ししながら、「ちょっと本人に電話して、直接聞いてみたら、どうや?」。驚きの展開に言葉を失っていると、研究室の黒電話を指差して「ここから、今かけるか?」とおっしゃいました。

小原先生は突然の電話にも関わらず、笑いながら「僕は、昔から、則元先生が大好きなんだよ。則元先生の元で勉強した君のためなら、喜んで協力するよ」と、これまでご自身が収集された研究資料、歴史的建造物古材の全てを、大学宛に送ってくださることになりました。それを聞いて驚かれたのは、今度は則元先生でした。「今すぐ伊東さん(伊東隆夫先生)<sup>(21)</sup>に言うてきなさい!」と部屋の扉を指さされ、私は慌てて3階から5階へと走りました。

その後、伊東先生が小原先生と相談を重ねて下さり、小原先生の古材の贈呈式を兼ねたシンポジウム<sup>(22)</sup>を生存圏研究所主催で開催することになりました。研究所所長の川井秀一先生、既に退官されていた則元先生も駆けつけてくださいました。さらに驚いたことは、小原先生が「せっかくの機会やし仲のいい友達も連れて行く」と、鈴木嘉吉先生<sup>(23)</sup>が真白のスニーカーで颯爽と来てくださったことでした。

シンポジウム当日は、緊張のあまり手と声が震える私の司会の様子を見かね、小原先生は壇上から降りて、私の背に手をあて、マイクを代わりに持ってくださいました。そして鈴木先生は「小原先生の前座を務めさせていただく鈴木でございます。僕も、緊張しております」とおっしゃって場を和ませてくださいました。シンポジウム終了後の別れ際、小原先生は「全部、大学に渡したんやなあ。これは貴女に」と茶封筒を手渡ししてくださいました。中に入っていたのは三つの木片。『ヒノキ材は100年後まで強度が上がり、その後緩やかに低下する』を導かれた、小原先生の実験試料そのものでした。

その後、それらの古材を用いた研究成果を、竹中大工道具館の展覧会図録『天平の匠に挑む 古代の知恵vs現代の技術』<sup>(24)</sup>へ寄稿した際、最終原稿に赤ペンを入れてくださったの

は鈴木先生でした。小原先生が鈴木先生とお引き合わせくださったのは、これからの古材研究は、木質科学と材料研究、そして歴史的建造物保全と建築史をもう一つの柱とせよ、という力強いメッセージだったと、今は確信しています。

## 不完全なるものと「京都学」

こうして振り返ると、千葉先生の「大切なのは気持ちかなあ」という、あのときのさりげない言葉は、単なる実務上の心得に留まらない教えでした。それは、今は目に見えなくとも確かにそこに存在する、過去から未来へと繋がる信頼と希望、そして温かな眼差しでした。

西村徳二郎先生は、遺跡から出土した陶片を前に「不完全なもの、壊れているものだからこそ、学ばせていただけることが大いにある」と語られました。その言葉の重みは、小原二郎先生から託された歴史的建造物古材の研究<sup>(25)</sup>を通じて、また濱田青陵先生が収集されたコプト織物の調査<sup>(26)</sup>を通じて、日毎に深く実感することになりました。

こうして振り返ると、土の下に眠る京都の歴史、埋もれた古道を丹念に探り続けられた千葉先生の学問は、語られたこと、語られなかったこと、語るべきこと、そして時にあえて選ばれた沈黙といった、様々な「あり方」への誠実な寄り添いに貫かれた対話そのものであったと私は感じています。

千葉先生から私たちに託されたこの眼差しこそが私にとっての「京都学」の精神であり、未来への確かな道標であると信じています。その物語を、次世代と共に紡いでいくことができると願っています。

## 注

- 1 西村徳泉(にしむら・とくせん、四代 徳二郎) 京焼・清水焼の陶芸家。京の名工。
- 2 「平成30年度特別展・文化財発掘Ⅶ 発掘 乾山窯」2018年、京都大学総合博物館・京都大学文化財総合研究センター主催。
- 3 高島屋美術部創設110年記念傘寿記念四代西村徳泉茶陶展、2018年2月、京都高島屋。
- 4 則元 京(のりもと・みさと) 木材物理学。京都大学名誉教授。木質科学研究所所長。
- 5 川井秀一(かわい・しゅういち) 木質材料学。京都大学名誉教授。生存圏研究所所長。
- 6 今村祐嗣(いまむら・ゆうじ) 木質保存学。京都大学名誉教授。(一財)建築研究協会代表理事常務理事。
- 7 角田文衛(つのだ・ぶんえい) 歴史学者。京都文化博物館初代館長。
- 8 山口県美東町民センター「古代の銅生産シンポジウム in 長登」2001年9月。

- 9 成瀬正和(なるせ・まさかず) 文化財保存科学。宮内庁正倉院事務所保存科学課長。「正倉院宝物の素材 日本の美術 (No.439)」など。
- 10 門脇禎二(かどわき・ていじ) 歴史学者。京都府立大学名誉教授。京都府立大学学長。
- 11 山田 正(やまだ・ただし) 木材工学。京都大学名誉教授。木材研究所所長。
- 12 梶田真章(かじた・しんしょう) 法然院貫主。
- 13 濱田 仁(はまだ・じん) 藻類学。富山大学医学部。
- 14 横山 操 「京都大学総合博物館所蔵コプト織物の分析」SPIRITS 国際シンポジウム「京都大学の埃及考古資料」京都大学百周年記念時計台記念館、2016年2月
- 15 梶谷宣子(かじたに・のぶこ) メトロポリタン美術館名誉館員。
- 16 続木泰子(つづき・やすこ) 進々堂。進々堂創業者の続木齊氏がバン留学の際に濱田青陵先生と出逢われ、以来、両家の親交が代々続いているそうです。
- 17 泉 拓良(いずみ・たくら) 考古学。京都大学名誉教授。
- 18 富井 眞(とみい・まこと) 考古学。大正大学文学部教授。
- 19 片山一道(かたやま・かずみち) 先史人類学・骨考古学。京都大学名誉教授。
- 20 小原二郎(こはら・じろう) 千葉大学名誉教授。「日本人と木の文化」など。
- 21 伊東隆夫(いとう・たかお) 木材組織学。京都大学名誉教授。「木の文化と科学」「木の考古学—出土木製品用材データベース—」など。
- 22 第18回生存圏シンポジウム 木の文化と科学II—歴史的建造物を探る—生存圏研究所木質ホール、2005年10月
- 23 鈴木嘉吉(すずき・かきち) 建築史家。元奈良国立文化財研究所所長。
- 24 『天平の匠に挑む 古代の知恵vs現代の技術』竹中大工道具館、2021年
- 25 例えば、Mechanical characteristics of aged Hinoki wood from Japanese historical buildings Yokoyama, M., Gril, J., Matsuo, M., Yano, H., Sugiyama, J., Clair, B., Kubodera, S., Mistutani, T., Sakamoto, M., Ozaki, H. *Comptes Rendus Physique* 10(7) 601-611, 2009年  
『建築古材博物館』—法隆寺建造物古材を基点とするデータベース構築—(科研費24H00113)として京都大学学術情報リポジトリ(KURENAI)に公開準備中。
- 26 例えば、京都大学総合博物館所蔵コプト織物の調査：分光法による染料分析。  
横山 操、中村力也、成瀬正和、村上由美子、東村純子、遠藤利恵、泉 拓良、考古学と自然科学日本文化財科学会誌(68)1-19、2015年  
エジプト遺跡出土織物資料データベース構築—京都モデルの提案(科研費19K21650)として京都大学学術情報リポジトリ(KURENAI)に公開準備中。

# 禍福は糾える縄の如し

千葉豊退職記念論集

[第1分冊]

2026年4月30日発行

編集 千葉豊退職記念論集刊行会

発行 クラフティブ電子出版株式会社

ISBN978-4-911672-07-5

本書の無断複写（コピー）は著作権法上の例外を除き禁じられています。